

# インタビュー形式の自由会話における終助詞「ね」の使用状況

## — 韓国人日本語学習者を中心に —

朴美貞(昭和女子大学大学院生)

### 1. 研究の目的

日本語母語話者の会話の中で使用する終助詞「ね」と「よ」の割合はおおよそ 3:1 である(メイナード, 1993) という報告もあり, 終助詞の中でも「ね」は多用される. 一方, 日本語学習者は, 初級から「ね」を学習するものの, 上級になっても適切に使えないと指摘されている. 日本語の習得が早いと言われている韓国人学習者にとっても「ね」を適切に用いることは困難であると報告されている(Bae, 2002 など).

「ね」は, 話題となる情報の所在によって, その出現が影響を受けうる. そのため, 本稿では, 話題を統制したインタビュー形式の自由会話における韓国人日本語学習者の終助詞「ね」の使用状況を分析し, その特徴を探ることを目的とする.

### 2. 先行研究

#### 2.1 情報のなわ張り理論の概要

神尾(1990; 2002)は, 会話において話題となる情報が話し手または聞き手のなわ張り内にあるかどうかによって用いられる言語形式が選択されると述べている. 神尾(1990; 2002)は, 終助詞「ね」を「情報のなわ張り理論」によって4つに整理している. また, 「ね」が欠けると文を不自然にする「ね」の使用を「必須」とし, 「ね」が欠けても不自然ではない「ね」の使用を「任意」としている. 次の表1に, 「ね」の性質を整理する. 表1の右側にある式の H は聞き手を, S は話し手を意味する. 1 は, 話し手または聞き手がその情報について「完全に

表1 神尾(2002)に基づく「ね」の分類

必須	①必須の「ね」	$H = 1$
任意	②任意の「ね」	$H < n \ \& \ S \geq H$
	③疑問の「ね」	$H > n \ \& \ S < n$
	④強調の「ね」	$H > n \ \& \ S > n$

知っている」ことを, 0 は「完全に知らない」ことを意味する. n は, 話し手または聞き手のなわ張りの「内」と「外」の境界を意味し, 1 から n の間が情報のなわ張りの「内」, 0 から n の間が情報のなわ張りの「外」である.

#### 2.2 自由会話をデータとする「ね」の習得研究

初鹿野(1994)は, 4人の初級学習者の1年間のインタビュー形式の会話データを用いて「確認を求める」, 「同意を求める」, 「同意を示す」, 「配慮・共感を示す」, 「共感を求める」, 「間投助詞」の6つの「ね」を調べている. その結果, 「配慮・共感を示す」, 「共感を求める」の「ね」を多く使用していると報告している.

柴原(2002)と張(2005)は, 「会話促進」, 「注意喚起」, 「発話緩和」, 「発話内容確認」, 「発話埋め合わせ」の5つの「ね」を調べている. まず, 柴原(2002)は, 中・上級の学習者6名を対象とし, 来日時と9ヶ月後のOPI(Oral Proficiency Interview)データを分析した結果, 9ヶ月間日本に滞在しても「ね」の使用に変化は見られず, 「ね」が適切に発話できるようになるのは上級以降になるという仮説を立てている. 張(2005)は, 上級台湾人学習者10名と日本語母語話者10名における約15分~20分の会話(接触場面:10会話, 母語場面:5会話)を分析している. その結果, 台湾人学習者の「ね」の使用頻度は, 日本語母語話者の半分以下であると述べている.

何(2008)は、初級から上級の中国語を母語とする学習者 25 名の OPI データを用いて「同意要求」、「同意受け入れ」、「確認要求」、「聞き手の発話に対する判断・意見・感想」、「聞き手の質問に対する情報」、「話し手の判断・意見・感想」、「聞き手への依頼・勧め・感謝・謝り・要望」、「話し手の質問」の 8 つの「ね」を調べている。その結果、中・上級になっても「ね」を適切に用いられない学習者が多いとしている。

楊(2010)は、中上級の中国人学習者 2 名と日本語母語話者 5 名を対象とし、10 ヶ月間に 5 回の会話(20 分)を収集している。この会話データを用いて「引き込み型」、「共感共有型」、「確認要求型」の 3 つの「ね」を調べた結果、「ね」の使用における大きな変化は観察できなかつたと報告している。

吉田(2011)は、初級から超級の韓国人学習者 111 名の OPI データを用いて「話し手情報(発話緩和・自己確認)」、「同意(同意要求・同意表明)」、「確認要求」、「フィラー」、「間投詞」の 5 つの「ね」を分析している。その結果、初級では「ね」の使用は少なく、中級では「同意」の「ね」の誤用が減り、上級では「話し手情報(発話緩和・自己確認)」の使用と誤用が増加し、超級では「ね」の使用が母語話者に近づいていると述べている。

以上のように、従来の研究では、「ね」を分類する区切り方が異なっているため、研究間の結果を比較しにくいという課題が残る。また、「ね」の機能を文レベルから分析しており、各機能における誤用や正用については数値を出している。しかし、使われるべきなのに使われていない欠落については言及はしているものの、詳細な分析は行われていない。「ね」は情報の所在によって出現するため、話題が統制できていない会話データでは、「ね」の出現が変わる可能性が高いことも従来の研究の課題であった。

### 3. 使用データの概要

データは、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」から採取した。このうち、自由会話を対象とする。自由会話は、ある程度統一させた話題(15 項目)で、調査実施者(日本語母語話者)と日本語学習者および日本語母語話者が会話(約 30 分)を行うものである。データ間での比較のため話題が統制されており、調査実施者が質問をしながら進めているインタビュー形式であることから、話題によって「ね」の出現が変動するという従来の課題をある程度解消できる。本稿では、インタビューされる側の 20 代の日本語母語話者(以下

表 2 対象者の情報

		性別	J-CAT の得点
母語話者(N=6)		男 3, 女 3	-
学習者(N=12)	上位群(N=6)	男 2, 女 4	250~349 点
	下位群(N=6)	男 2, 女 4	150~249 点

「母語話者」)6 名と韓国人日本語学習者(以下「学習者」)

12 名の 18 会話を対象とする。表 2 は、対象者の性別と J-CAT(Japanese Computerized Adaptive Test) の得点である。学習者は、上位群と下位群に分ける。

## 4. 研究結果

### 4.1 終助詞「ね」の頻度数の集計

分析対象は、文末に付く単独の終助詞「ね」である。語中、文中、フィラーおよび「よね」は、分析対象外とする。フィラーは、(1)のように、はいいいえで答えられない質問に対する「そうですね」である。以下、C は調査実施者を、J は母語話者を、K は学習者を意味する。

- (1) C : 生活をする場所として何が一番大事ですか。  
 J : あーそうですね。でもやっぱりゆっくり休めるとかー(中略)そういうのがいいなってゆう

表 3 は、「ね」を「情報のなわ張り理論」の 4 つの枠組み(①「必須の『ね』」、②「任意の『ね』」、③「疑問の『ね』」、④「強調の『ね』」)に分類し、欠落と誤用を加え、一人当たりの使用数を算出したものである。



いう追加の質問に、Kは「はい」に加えて「わかめスープは必ず飲む」という情報を繰り返して述べている。その後も、Cの「必ず」と「今でもやるんですか?」という質問にKは、「はい」と「そう」で答えるだけで情報は追加していない。(5)では、追加される情報がないまま、会話のターンが増えている。つまり、学習者の「はい」の使用は間違いではないが、話し相手に与える情報が少なくなり、話題の広がりに限られるなどの影響があると考えられる。

## 5. 結論と今後の課題

本稿では「情報のなわ張り理論」における「ね」の4つの枠組みを用いて、学習者の終助詞「ね」の使用状況を分析した。その結果、学習者は、欠落と誤用は殆どなく、「そうです」以外の文に②「任意の『ね』」をよく付ける傾向があった。また、「そうですね」の代用として「はい」を使用し、追加の情報を述べないことが、談話の流れに影響を与えていると考えられる。従来の研究では、「ね」の分類方法が異なるため、研究結果を比較しにくい問題があった。しかし、「情報のなわ張り理論」を使うことによって「ね」を普遍的に分類することができたと考えられる。また、話題による「ね」の出現が統制できている「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を使うことによって、データ間の比較が容易にできたと考えられる。

同じ30分の会話でも母語話者と学習者では発話量が異なり、それが「ね」の出現量にも影響していることが考えられるが、本稿では発話量を考慮した分析をすることができなかった。今後は、発話量に比しての「ね」の使用頻度を調査する必要がある。

### 参考文献

- Bae Deokhui(배덕희 2002). 한국어‘요’, 일본어‘ね’・‘よ’와 그 교육(韓国語の「よ」, 日本語の「ね」・「よ」とその教育) 日本語文学, 12, pp.21-47.
- 張鈞竹(2005). 台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用—コミュニケーション機能を中心に— 言語情報学研究報告, 6, 281-299.
- 初鹿野阿れ(1994). 初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—「ね」を中心として— 言語文化と日本語教育, 8, 14-25.
- 何桂花(2008). 日本語教育における終助詞「ね」の習得の特徴—インタビュー形式の会話における中国語を母語とする学習者を中心に— 日本語・日本文化研究, 18,117-126.
- 神尾昭雄(1990). 情報のなわ張り理論 大修館書店
- 神尾昭雄(2002). 続・情報のなわ張り理論 大修館書店
- メイナード.K.泉子(1993). 会話分析 くろしお出版
- 柴原智代(2002). 「ね」の習得—2000/2001 長期研究 OPI データの分析— 日本語国際センター紀要, 12, 19-34.
- 楊虹(2010). 中国人日本語学習者の終助詞の使用に関する一考察 お茶の水女子大学人文科学研究, 6, 199-208.
- 吉田たか(2011). 韓国人日本語学習者の終助詞使用状況—「ね」の使用を中心として— 日本語学研究, 32, 155-167.